

氏 名	熊 仁 芳
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（言語コミュニケーション文化）
学 位 記 番 号	甲言第10号（文部科学省への報告番号甲第432号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2012年3月16日
学 位 論 文 題 目	対格残存受身文に関する日中対照研究
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 于 康 （副査） 教 授 神 崎 高 明 教 授 梅 咲 敦 子 潘 寿 君（北京第二外国語学院教授） 村 木 新次郎（同志社女子大学大学院教授）

論 文 内 容 の 要 旨

熊仁芳氏の学位申請論文は、「対格残存受身文に関する日中対照研究」と題して、これまでは明確にされていなかった、日本語の対格残存受身文の定義と分類、対格残存受身文における動調の意味制約、主格名詞と対格名詞との共起関係、対格名詞が残存するメカニズムを中心に、中国語との対照を踏まえた上で、体系的なおかつ包括的に明らかにしようとするものである。本論文は、5部14章から構成されている。

第Ⅰ部は序論であり、第1章「研究の概述」と第2章「対格残存受身文の定義」からなる。第Ⅰ部では、研究の目的や研究の方法論、対格残存受身文の定義やその他の術語の定義を中心に、研究の土台を示したものである。

第1章では、日本語学と中国語学の両サイドから、受身文に関する先行研究を通時的ならびに共時的にまとめ、それぞれの問題点を明らかにした上で、位置づけと規定、統語的特徴、意味的特徴といった3つの視点からこれまでの対格残存受身文に関する先行説を解析し、未解決の問題点を指摘している。第2章では、対格残存受身文を他動調受身文の下位分類の一つとして捉え、先行説を詳細に分析した上で、「対格残存受身文とは、能動文における他動詞の対格名詞句の主要部が、受身化される際、受身文の主語の位置に移動せず、元の位置に残存する他動詞受身文である。」と定義している。この定義に基づき、本論文では、対格残存受身文の構文形式は、「彼は校長先生から金賞を与えられた。」「花子は太郎に頭を殴られた。」「花子は太郎に頭に水をかけられた。」「花子は太郎に隣で煙草を吸われた。」「他被授予金质奖章。」「他被弟弟打了头。」「花被她浇了水。」「箱子被她捆上了绳子。」「衣服被火烧了一个窟窿。」「那块布被她作了一条裤子。」「青椒被她炒了肉丝。」のように、日本語なら「XがYにZをV(ら)れる。」、中国語なら「X被Y V(C/Asp) Z。」であるとしている。これまでの先行研究の問題点を踏まえて、研究の目的は、主に「①対格残存受身文について従来の研究と異なる捉え方をし、そのカテゴリーを明らかにする」こと、「②非所有所属関係のタイプを明らかにし、所有所属関係との連続性を指摘する」こと、「③日中両言語における対格残存受身文の成立条件の共通点・相違点を明らかにする」こととしている。

第Ⅱ部は「対格残存受身文における動詞の役割」であり、第3章「動詞を考察する目的と方法」、第4章「接触動詞文における共起成分の生起条件」、第5章「状態変化動詞文における共起成分の生起条件」、第6章「生産動調文における共起成分の生起条件」、第7章「奪取動詞文における共起成分の生起条件」、第8章「付着

動詞文における共起成分の生起条件」、第9章「対格残存受身文における動詞の役割とその限界性」からなる。第Ⅱ部では、主として、異なる種類の動詞の意味が如何に共起成分の共起を制約するかについて考察し、そのプロセスを究明し、対格残存受身文における動詞の意味制約の限界性も明らかにしようとするものである。

第3章から第9章までは中国語との対象といった視点から対格残存受身文における動詞の役割について、主に対格残存受身文に用いられる接触動詞、状態変化動詞、生産動詞、奪取動詞と付着動詞の5種類の動詞を対象に、異なる種類の動詞の意味が如何に共起成分の共起を制約するかについて詳細に考察したものである。

第Ⅲ部は、「主格名詞と対格名詞の意味関係」であり、第10章「所有関係を持つ対格名詞と主格名詞」、第11章「所有関係をもたない対格名詞と主格名詞」からなる。第Ⅲ部では、対格名詞と主格名詞が所有関係を持つものについて、譲渡可能所有 / 譲渡不可能所有と所有傾斜の視点から再考察し、意味制約を受けない対格名詞と主格名詞の共起類型や共起条件を明らかにし、また、両者の連続性についても検討したものである。

第10章では、所有傾斜の視点から、日本語と中国語の対格残存受身文における対格名詞（所有物）と主格名詞（所有者）の物理的・心理的な密接関係を詳細に考察し、日本語は「身体部位、側面＞着衣類、生産物＞親族、一般所有物」、中国語は「身体部位、側面＞着衣類＞一般所有物＞生産物、親族」のように、日本語と中国語とでは異なる所有物の階層が存在することを明らかにした。日本語は、譲渡不可能な「親族」と譲渡可能な「一般所有物」が同じ階層にあり、譲渡可能な「生産物」より低い階層にあるのに対し、中国語は、譲渡不可能な「親族」は成立不可能であるが、譲渡可能な「一般所有物」は成立可能であるなどの興味深い現象を明らかにしている。また、譲渡可能と譲渡不可能という分類は完全に対立するものではなく、両者の間にファジーの部分、つまりグレーゾーンが存在することを明らかにしている。

第11章では、日本語と中国語における対格名詞Zと主格名詞Xとの間に意味の制約関係が見られない対格残存受身文を中心に考察している。日本語には、「太郎は花子に頭に水をかけられた」構文、「彼は先生から本を渡された」構文、「彼は田中に頭をさげられた」構文、「花子は太郎に煙草を吸われた」構文のように、四つのカテゴリーが見られるのに対し、中国語には、「他被授予金奖」構文、「大门上被挂了锁」構文、「衣服被烧了一个窟窿」構文、「水被浇了花」構文、「他被公司炒了鱿鱼」のようなコロケーション用法といった五つのカテゴリーが存在することを明らかにしている。

主格名詞X、対格名詞Z、動作主Y、この三つのNPのそれぞれのその他との意味関係について、中国語が、ZとXとの間に意味関係を持たないだけでなく、ZとYとの間にも意味関係を持たないのに対し、日本語は、「太郎は花子に頭に水をかけられた」のように、主格名詞Xと対格以外の他の斜格名詞との間に何らかの意味関係を持つ構文もあれば、「彼は田中に頭をさげられた」のように、対格名詞Zと動作主Yとの間にも何らかの意味関係を持つ構文もあり、また中国語と同様に、「彼は先生から本を渡された」や「花子は太郎に煙草を吸われた」のように三者の間に意味関係を持たない構文も見られることを明らかにしている。

第Ⅳ部は、「対格残存のメカニズムと対格残存受身文のカテゴリー」であり、第12章「有題文と対格残存受身文」、第13章「対格残存受身文のカテゴリーと特徴」からなる。第Ⅳ部では、有題文との関わりから対格名詞の残存の原因を明らかにした上で、対格残存受身文のカテゴリーの分類を提案し、受身文の分類を再構築するものである。

第12章では、対格残存受身文について、下位分類を試み、各カテゴリーの統語的、意味的な特徴を検討し、「受動者受身文」、「所有者受身文」、「非所有者受身文」のように三つの下位分類ができることを明らかにした。

第13章では、有題文との関連から対格残存受身文の使用動機と対格名詞句Zの残存するメカニズムを明らかにした。対格残存受身文のXには、①定名詞であること、②動作の働きかけを受けないことのように、2つの制約が見られる。これによって、Xが主語に昇格されるのではなく、主題になり、この主題こそが対格残存受身文が生起する動因であることが明らかになった。

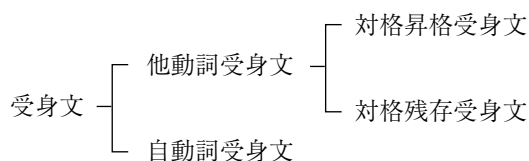
第V部は、「結論」であり、第14章「結論と今後の課題」となる。

論文審査結果の要旨

熊仁芳氏の学位申請論文は、中国語をランドマークとして、日本語における「対格残存受身文」、および「対格残存受身文」における日中両言語の異同を体系的なおかつ包括的に明らかにしようとするものである。以下において、本論文のオリジナリティと独創性を中心に審査の結果をまとめてご報告申し上げる。

1. これまで見られなかった先行研究に関する体系的研究

「対格残存受身文」は、日本語にも中国語にもよく観察される構文であるが、これまでは、「対格残存受身文」に関する議論は、それぞれの研究者の立場によって、分類に関しても、統一した見解が見られないぐらい、まとまったものが存在していなかった。本論文は、まず研究の基盤となる先行研究を、統語論と意味論のそれぞれの立場で整理分析し、体系化を試みた。その結果、意味論に基づく分類よりは、統語論に基づく分類の方が、より一般化ができ、スキーマ的な分類ができることが明らかになった。それを踏まえた上で、「対格残存受身文」を次のように定義した。「対格残存受身文とは、能動文における他動詞の対格名詞句の主要部が、受身化される際、受身文の主語の位置に移動せず、元の位置に残存する他動詞受身文である。」。その上で、「日本語：XがYにZをV（ら）れる。」「中国語：X被YV（C/Asp）Z。」を基本構文と見なし、受身文を次のように分類している。



先行研究は膨大ではあるが、本論文の整理は、非常に的を射たものであり、これまでの統語論と意味論の議論が混同している現状を打破し、日本語と中国語の先行研究を体系的なおかつ正確にまとめ、明確な研究の土台を構築することに成功したと考えられる。これまで見られなかった先行研究に関する体系的研究は、本論文が最初であるため、高く評価したい。

2. 動詞の意味機能と共起項の選択との制約関係の明確化と限界性の指摘

対格残存受身文においても、動詞が大きく寄与していることは当然のことであろう。しかし、動詞の意味機能がいかんして共起項の生起に起用しているかについては、これまで、必ずしも明らかにされたわけではない。本論文は、まず動詞の意味機能と共起項の選択との制約関係に注目し、接触動詞、状態変化動詞、生産動詞、奪取動詞、付着動詞を中心に、中国語との対照という視点から、項の生起との制約関係を詳細に考察し、そのメカニズムを明らかにしようとしたものである。その結果、表1のようにまとめられる。

要するに、①Zが動詞の意味に制約され、意味類型の異なる動詞と共起するZが、それぞれ異なる。Xと所有所属関係をもつZもあれば、Xと所有所属関係を持たないZもある。②対格残存受身文に見られるXは、大きく「有情物」と「無情物」に分けられる。日本語では無情物より有情物Xが圧倒的に多数である。中国語では、日本語と比べ、無情物Xが多く見られる。③Xが動詞の意味に制約されるか否かに関しては、動詞の働きかけを直接的に受けているものもあれば、動詞に直接的に支配されず、間接的に動作の影響を受けているものもある。④結果、対格残存受身文においては、対格名詞Zが共起する動詞に制約されるが、主格名詞Xは完全に動詞に制約されず、事象の影響を受けるものである。

一方、本論文は、対格残存受身文における動詞の意味制約の限界性についても考察を行った。動詞は、ZやYを制約できるのに対し、Xは、制約できない場合があることを明らかにした。

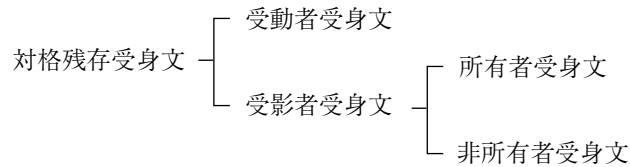
表1 動詞とXの意味機能からみたZの生起

動詞と共起するZ		接触動詞		状態変化動詞		生産動詞		奪取動詞 I		奪取動詞 II		付着動詞	
		日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中
Xと所有関係をもつZ	Xの部分	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×	○	○
	Xの着衣類	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○
	Xの所有物	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	×	×
	Xの人間関係	○	×	○	○	×	×	×	×	○	○	×	×
	Xの側面	×	×	○	○	×	×	○	○	○	○	×	×
Xと所有関係をもたないZ		×	×	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○

動詞の意味機能から共起項の生起の条件を明らかにするのはオーソドックスな方法ではあるが、このアプローチを通して、これまでに明らかにされてこなかった、対格残存受身文における動詞の意味機能が項の生起にいかに関係するのかを明確にしたことは、非常に有意義であり、なおかつ考えさせられるところがあるものである。示唆性の高い結果は、高く評価したい。

3. 対格残存受身文の細分類と、それぞれの細分類における日本語と中国語の異同の一般化明示の試み

本論文は、XとZの意味関係に基づき、日本語と中国語の対格残存受身文を「所有所属関係」の対格残存受身文と「非所有所属関係」の対格残存受身文に二分分類し、それぞれの構文におけるXとZとの共起関係を明らかにした。また、「所有所属関係」の対格残存受身文と「非所有所属関係」の対格残存受身文との間に連続性があることを指摘し、ZとYの関係およびZ、YとXとの関係も明らかにした。以上を踏まえると、対格残存受身文は、さらに二分分類できる。



それぞれのカテゴリーにおいて、日本語と中国語の構文条件と意味機能の違いは、主に次の4点において顕著である。

(1) 日本語と中国語の対格残存受身文における対格名詞は、主格名詞の「全体の部分」「着衣類」「所有物」「側面・性質」「動作行為」「人間関係」を表すという共通点が見られるが、中国語は主格名詞の「部分の量」を表す対格名詞が存在するのに対し、日本語ではそれは見られず、また、日本語は主格名詞の「関与空間」を表す対格名詞があるのに対し、中国語はそのような用例が見られないといった違いが存在することを明らかにしている。さらに、対格名詞と主格名詞とが譲渡不可能な所有関係か否かによって、対格残存受身文の意味も違って来るし、同じ譲渡不可能な所有関係で、あっても、その内部は、所有者との関係の密度が同一ではなく、階層が見られることも明らかにしている。

(2) 主格名詞Xと対格名詞Zが意味関係をもたない対格残存受身文は、日本語には4種類、中国語には5種類あることを明らかにし、主格名詞X、対格名詞Zと動作主Yの三者の関係は、日本語と中国語とでは非常に異なることも明確にしている。

(3) 受身文の主格名詞Xは、日本語は、対応する能動文の対格成分から昇格されたものもあれば、能動文の対格成分の属格成分から昇格されたものもあり、能動文に含まれていない成分が増やされたものも見られ

るのに対し、中国語は、能動文の対格成分から昇格されたものが殆どである。特に、日本語では成立しかねる場所や道具を表す格成分は、中国語ではXになり得る。

(4) 表2のように、日本語も中国語も「受動者受身文」と「所有者受身文」が成り立つが、「非所有者受身文」は、日本語には容易に観察されるのに対し、中国語にはなかなか観察されない。「所有者受身文」は、成立の可否について日本語と中国語とでは条件が異なり、中国語はZがXの人間関係を表す場合、所有者受身文の成立が難しい。一方、日本語では、Xが事象の参加者かどうかは、文の成立を決めるほど重要な条件ではない。それよりむしろ、Xが事象に心理的に関与するかどうかが重要である。事象には参加しなくても、心理的に事象に関与すれば成立する。事象に心理的に関与するX = 受影者が受身文の主語に立つのが一般的であるため、日本語では非所有者受身文が発達しているのである。

表2 対格残存受身文の下位分類とその特徴

対格残存受身文の下位分類			受身文の成立		受身文の特徴			
			日 本 語	中 国 語	X = 事象 の参加者 か否か	構文上迷惑性の有無		Xと事象 内NPの 所有関係
						日本語	日本語	
受動受身文	①彼は賞金を与えられた。		○	○	事象の直 接参加者 (Vの格 成分)	×	×	無
	②花は水をかけられた。		△	○		×	×	無
	③壁は絵をはられた。		×	○		／	×	無
	④布はズボンを作られた。		×	○		／	×	無
	⑤服は火に穴を焼かれた。		×	○		／	×	無
受影受身文	所有者	⑥彼は頭を殴られた。	○	○	事象の間 接参加者	×	×	有
		⑦彼は財布を盗まれた。	○	○		×	×	有
		⑧彼は先生に弟を叱られた。	○	×	△	／	有	
	非所有者	⑨彼は隣人に家を作られた。	○	×	参加者では ない	○	／	無

(5) 日本語の対格残存受身文は「受影者」の受身が一般的であるのに対し、中国語では「受動者」の受身が一般的である。

本論文は、受身文をまず他動詞受身文と自動詞受身文に分類し、その次に、他動詞受身文を対格昇格受身文と対格残存受身文に細分類した上で、対格残存受身文を、さらに、受動者受身文と受影者受身文に分類し、その受影者受身文を所有者受身文と非所有者受身文に分類している。他動詞と自動詞の認定がまだ確定された定義がない中で、動詞が自動詞か他動詞によって、受身文进行分类するのは些か難儀なところがあるとしても、現段階では、非常にわかりやすく、なおかつ対照研究にとっても、統一した分類ができたといえるであろう。この点において、貢献度が高く、これからの受身文の研究に重要な一石を投じたものと高く評価したい。

中国語との対照研究は、ただ日本語の文をいかに中国語に訳すか、または中国語の文をいかに日本語に訳すかというレベルのものではなく、対格残存というメカニズムを明らかにするために、それぞれの対格残存受身文を明らかにした上で、日本語と中国語との異同を体系的に究明したものであり、両言語に通底する一般化を求めるものである。本論文のように、体系的なおかつ包括的に対格残存受身文を、日中対照という視点から明らかにしようとするものは、これまでは前例を見ないものであることから、先駆的研究であると言える。

本論文は、データが豊富、論証が綿密なおかつ明快、因果関係が明白、結論も首肯できるものであり、日本語や中国語の対格残存受身文の研究だけでなく、受身文の研究全体に大きな影響を与える非常に重要でかつすぐれた論考であると審査員一同が高く評価している。

このように、熊氏の学位申請論文は極めて高い学術内容を持つものであるが、問題点が一切ないというわけではない。たとえば、動詞の意味機能と共起項との制約関係は、考察対象の動詞の類型を更に広げて観察する必要があるし、また、有題文や対格残存受身文の生起のメカニズムに関する議論は、受身文全体を視野に入れ、なおかつ関連付けながら考察や検証を進めればより生産性を有する一般化を得ることができるであろう。これらの問題点は、今後の課題となるが、本論の博士学位請求論文としての価値を損なうものでは決していない。

以上、審査員5名は熊仁芳氏の論文を慎重に審査し、2012年1月23日に行った口頭試問の結果を併せて協議した結果、熊氏の論文が博士（言語コミュニケーション文化）の学位を授与するに相応しいものであると判断するに至り、ここに報告するものである。